



雪の夜、年下の幼なじみに

～お姉さんは、もう抗えない～

雪の夜、年下の幼なじみに（体験版）

蜜夜文庫

「お姉さんは、もう抗えない」

蜜夜文庫

――

【体験版】 本作の冒頭（第1話前半）を収録しています。

――

■ 第1話・前半（無料）

二年ぶりに帰省した、雪国の実家。来栖詩乃、20歳。昔は「しのお姉ちゃん」と慕ってくれた、隣の家の幼なじみ・湊。久しぶりに会った彼は、見上げるほど背が伸びて、知らない男になっていた――。年下に翻弄される、甘くせつない冬の恋。全5話・約21,400字。

第二話 初雪と、知らない背中

新幹線を降りて在来線に乗り換えると、窓の外の色がだんだん白くなっていった。

来栖詩乃は、コートの襟に顎をうずめて、流れていく景色を眺めていた。東京を出たときは曇り空だっただけなのに、県境のトンネルを抜けたとたん、世界は雪に変わっていた。田んぼも、屋根も、遠くの山も、ぜんぶ白い。子どもの頃から見慣れた景色のはずなのに、二十八になって戻つてくると、少しだけまぶしく見えた。

帰省するのは、二年ぶりだった。

仕事が忙しいというのは、半分は本当で、半分は言い訳だった。東京での暮らしに慣れて、この静かな町に帰るのが、だんだん億劫になっていた。それでも今年は、母から「お正月くらい顔を見せなさい」と何度も電話があつて、年末の三十日に、やつと重い腰を上げた。

無人駅のホームに降りると、頬を刺すような冷たさが押し寄せてきた。息が白い。マフラーを巻き直して、詩乃は小さく身震いをした。

実家までは、駅から歩いて十五分ほど。除雪された道の両脇に、人の背丈ほどの雪の壁ができています。スーッケースのキャスターが雪に取られて、なかなか前に進まない。革のブーツの中に、冷たさがじわじわと染みってくる。

「……東京、こんなに歩かなかったな」

ひとりごとをこぼして、白い息を吐く。

実家の前まで来ると、玄関先の雪が、きれいにかき分けられていた。母がやったにしては、力強い。雪の山の作り方が、几帳面で、若い。

不思議に思いながら引き戸を開けると、奥から母が出てきた。

「あら、詩乃。早かったわね」

「ただいま。……ねえ、玄関の雪、お母さんがやったの？」

「まさか。湊くんよ」

その名前を聞いて、詩乃の胸の奥で、小さく何かが揺れた。

「湊くん？」

「隣の春川さんよこの。あなた、覚えてないの。小さい頃、あんなにくつついて回ってたじゃない」

覚えていないわけがなかった。

春川湊。隣の家の、四つ下の男の子。詩乃が小学生の頃、ランドセルを背負った湊が「しのお姉ちゃん、しのお姉ちゃん」と、子犬みたいに後ろをついて回っていた。泣き虫で、すぐ転んで、膝をすりむいては詩乃のところに駆け込んできた。あの頃の湊は、詩乃にとって、弟みたいなものだった。

「湊くん、まだこの町にいるの？」

「いるわよ。市役所に勤めてて。うちの雪かき、いつも気にかけてくれてね。ほんと、いい子に育って」

へえ、と詩乃は曖昧に相槌を打った。最後に会ったのは、たしか湊が高校生の頃だ。ひよろつと背の高い、声変わりしたばかりの少年。あれからもう、六年も七年も経っている。

頭の中の湊は、いつまでも泣き虫の弟のままだった。

その日の午後、詩乃が荷ほどきをしていると、玄関のチャイムが鳴った。母が出ていく気配がして、それから、低い声が聞こえた。

「こんにちは。屋根の雪、けっこう積もってたんで、下ろしときましたよ」

「あらあら、いつもごめんねえ。今ね、詩乃が帰ってきてるのよ」

詩乃、という自分の名前に、心臓が小さく跳ねた。なぜだろう、と思う間もなく、廊下を歩く足音が近づいてきて、襖が開いた。

「……しのお姉ちゃん」

顔を上げて、詩乃は言葉を失った。

そこに立っていたのは、記憶の中の少年ではなかった。

背が高い。詩乃が見上げるくらいに。雪かきをしてきたのか、ダウンジャケットの肩に雪が残っていて、頬がうつすら赤い。子どもの頃の面影は確かにあるのに、顎のラインも、首の太さも、肩幅も、すっかり男のものになっていた。低い声が、知らない人みたいに響く。

「久しぶり。……えっと、すごい大人になってて、びっくりした」

湊が、照れたように笑った。その笑い方だけは、昔のままだった。子犬みたいな、人懐っこい笑顔。けれどその顔が、大人の体についていることが、詩乃をひどく落ち着かなくさせた。

「ひ……久しぶり。湊くん、その、おつきくなつたね」

言ってから、自分の言葉の幼さに、かつと頬が熱くなった。おつきくなつたね、なんて、まるで親戚のおばさんだ。

湊は氣にした様子もなく、部屋の中をちらりと見て、それから詩乃の顔に視線を戻した。その目が、昔とは違っていた。まっすぐで、少しだけ、こちらの奥を覗き込むような。

「お姉ちゃん、疲れた顔してる」

「えっ」

「東京、忙しいんですよ。なんか、昔より痩せた」

ずけずけと言われて、詩乃は返す言葉に詰まった。痩せた、と言われたのは、別に痩せたねという褒め言葉ではなくて、心配されているのだと、声の調子でわかった。四つ下の、昔は鼻水を垂らしていた男の子に心配されて、なんだか妙な気分だった。

「……平気だよ。ちよつと、年末で疲れてるだけ」

「ふうん」

湊はそれ以上は聞かずに、「じゃあ、また来ます」と母に頭を下げた。帰り際、もう一度だけ、詩乃のほうを振り返った。

「お姉ちゃん。明日もたぶん、雪かきに来るから」

「うん。……ありがとう」

玄関の戸が閉まって、湊の足音が雪を踏んで遠ざかっていく。

詩乃は、しばらくその場に座り込んだまま、動けなかった。胸の奥が、まだ少し、ざわざわしている。あんなの、ただの幼なじみじゃないか。弟みたいなものじゃないか。そう自分に言い聞かせても、さっきのまつすぐな目が、頭から離れなかった。

窓の外で、また雪が降りはじめていた。

夜、母が早めに寝てしまったあと、詩乃はひとりで居間のこたつに入っていた。

古い石油ストーブが、ちりちりと音を立てている。テレビは年末の特番をやっていたけれど、音を小さくしていたので、ほとんど雪の降る音しか聞こえない。東京のマンションでは、こんな静けさはなかった。静かすぎて、自分の心臓の音まで聞こえそうだった。

みかんをひとつ剥きながら、詩乃はぼんやりと、昼間の湊のことを考えていた。

明日もたぶん、雪かきに来るから。

あの低い声で言われたとき、自分の胸がどう動いたか。それを思い出すと、また落ち着かなくなる。詩乃は小さく頭を振って、みかんを口に放り込んだ。

「……何、考えてんだろ」

二十八にもなつて、四つ下の幼なじみにどきどきするなんて、どうかしている。明日になれば、きつといつもの調子に戻る。湊だつて、ただ近所のお姉さんとして気にかけてくれるだけだ。

そう思っていたのに。

窓の外で、雪を踏む足音がした。

こんな時間に、誰だろう。詩乃が顔を上げると、玄関の引き戸が、控えめにノックされた。

——ここから先は、雪に閉ざされた、二人だけの夜です。❤️（有料パート…第1話後半〜第5話収録）

…

——続きは、製品版でお楽しみください。